

後藤新平「後藤新平書簡」大正9（1920）年12月11日

御書翰難有

拝読、縷々御懇

諭骨肉に倍する

御友情深く奉謝候。

小生はいやしく苟も市

会の決議たる以上、

市公民として之に

応し度と真面たく

目に相考、あいかんがえ直に全ただち

諾を表し度は

山々に御坐候へとも、

欧米漫遊歸

朝以来、御承知

の通大調査

機関設置に関

し首相に相詢り

居候行懸有之、

此方より偶発のこちら

市長問題の為た

め皇国安危の

かゝる大策として

提出し置、落

着に到らざる

間に市会の

申出に応し候儀

は、如何にしても小生

性質として敢行

困難に有之、事

情を悉し辞退

いたし候。なにぶん何分にも

先方事情も気

の毒にて小生微意

一いっ時に徹底致とき

し兼候かねそうろうより、先生

始め各諸方面に

煩累を及したるはんるい

やの報に接し候。

明日渋沢子爵

来訪の約申来候。

是も説破せっぱの為た

めと被察候。さっせられそうろう本日

工業倶楽部にて

市政自治に関する

集会相催候席

上、市長問題に及

ひ、稍強制ややの決

定試みむとの

提議も有之候へとも

反対論も有之、

なんらこれ

何等是に関する

決定を見ずして

無事終了散会

致し候。書外は異

日拝話にゆつり候。

草々拝答申上候。

敬具

十二月十一日

新平

石黒子爵老大人閣下

侍曹